

とく  
徳

ほう  
朋

間に合っていた

くろはぎ まさみ  
黒萩 昌



くろはぎ まさみ  
1956－現在  
北海道生まれ。真宗大谷  
派法誓寺住職

今までいろんなことに会ってきたように、私たちはこれからもいろんなことに会っていかなければなりません。もしかしたら、今まで以上に辛い<sup>つら</sup>ことに会っていかなければならないのかもしれない。これまで辛い<sup>つら</sup>ことにも会ってききましたが、何とか頑張<sup>つら</sup>って生きてこれました。なぜ頑張<sup>つら</sup>れたかと言うと、色んなことが何となく間に合<sup>あ</sup>ってきたからなのです。おいしいものを食べるだけで幸<sup>しあわ</sup>せを感じることが出来ました。(中略)不安をごまかすものはまわりにたくさんありました。結婚や子育ても私たちに生きる目標を与えてくれました。

しかしよくよく考えてみると、事実としておいしい食べ物も気に入った服も、旅行もやさしい家族も、最後は全く間に合<sup>あ</sup>わなくなるのです。年を重ねるとともに、ひとつひとつのことが、実は間に合<sup>あ</sup>わないものだったという事実があらわになってきます。その時に私たちにとってのごまかしの効<sup>き</sup>かない人生が始まるのかもしれない。しかしそのことは無意味なことではありません。なぜならば、もともと間に合<sup>あ</sup>わないものであったものを、間に合<sup>あ</sup>わないと気付かせるそのことが、人生を根底<sup>こんてい</sup>から問い直す大事な機縁<sup>きえん</sup>になるからです。

いざとなると人間は弱いものだと思います。病気になって、だんだん身体が弱<sup>よ</sup>ってくる。そして痛みと苦しさの中、やはり私たちはイライラしてくるのではないのでしょうか。(中略)病状が進めば進むほど、愚痴<sup>ぐち</sup>と怒りの根性が自分の中を駆<sup>か</sup>け回る。病気になるということはそう

いうことではないかと思えます。そしていったんそこに落ちたら、もうそこから自力で這い上がる事は不可能です。特発性間質性肺炎で六十二歳で亡くなられた祖父江文宏先生もまた、苦しい闘病生活の中で、どこにも持って行きようもないご自身の怒りの心を持ってあましたことが幾度もあったのだらうと思えます。そんな祖父江先生の詩集に

文宏よ おまえはなんの不足があつて怒るのか これほどに ひとびとの愛に囲まれていながら 何の不足があるのか なぜ 怒るのか おまえを見捨てているのは お前だけだ という一編の詩があります。これは祖父江先生ご自身のいのちの根底から聞こえてきた如来の声なのでしょう。そしてその如来の声に照らされて、祖父江先生に「ひとびとの愛に囲まれていながら、ひとり怒っている」ご自身の姿が見えてきたのでしょう。これを自覚と言うのです。ここに愚痴と怒りのただ中であつて、その愚痴と怒りの心を超えていく唯一の道があるのだと思えます。

人は年を重ねるとともに「家族に迷惑をかけないように命終えて行きたい」という気持ちが切実になってくるようです。しかし、なかなかそうはいきません。死の縁は無量です。どんな死に方をするのかは全くわかりませんし、選ぶ事もできません。祖父江先生もまた辛い闘病生活の中、ご自身の怒りの心に翻弄されたこともありました。しかし、そこに道を開いてくれるのが自覚です。自分を知るという事、罪深く愚かな身の事実を知ることなのです

(『ごまかしのきかない人生』)



私たちが生きがいとしている事も、最終的には何も間に合わなくなります。その時に初めて自分の人生を問い直す機会になってくるのだと思えます。(哲弘 拝)



この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思えますが、気にせず読んでみて下さい。